

1979年度水理実験センター施設利用状況

(1980年2月28日現在)

	教 育 関 係		研 究 関 係	
学 群	1. 地形学営力論実験受講者	8人×17回=136	卒業研究利用者	利用期間
	2. 農林学類, 水理実験	15人×10回=150	自然学類	6人 (6ヶ月~9ヶ月)
	3. 基礎工学類, 構造工学基礎実験	10人×32回=320	農林・生物学類	2人 (6ヶ月~9ヶ月)
	4. 水文学特論	30人×2回=60		
	5. 地球科学基礎論実験	25人×1回=25	3年生	
	6. 自然学類新入生オリエンテーション	40人×1回=40	自然学類	5人 (6ヶ月~9ヶ月)
	7. 農林・生物学類, 実験実習	30人×1回=30		
		小 計	761人	小 計
大学院			地球科学	7人 (通 年)
			環境科学	1人 (通 年)
		0人	小 計	8人
教 官	1. 地形学営力論実験指導	2人×17回=34	地球科学系	7人 (通 年)
	2. 農林学類, 水理実験指導	2人×10回=20	農林学系	1人 (通 年)
	3. 基礎工学類, 構造工学基礎実験指導	2人×32回=64		
	4. 水文学特論実験指導	1人×2回=2		
	5. 地球科学基礎論実験指導	1人×1回=1		
	6. 自然学類新入生オリエンテーション 実験指導	1人×1回=1		
	7. 農林・生物学類, 実験実習指導	1人×1回=1		
		小 計	123人	小 計
その他			在外研究員	1人 (6ヶ 月)
			留学生	1人 (通 年)
		0人	小 計	2人
	総 計	7件 884人	総 計	31件 31人

注：施設の見学者は学内・学外を問わず多数にのぼっているが、今年度は表に加えなかった。

主 な 行 事

年 月 日	記 事
1979. 2. 21	第10回水理実験センター運営委員会開催。出席者：井口、安達、中川、吉野、市川、榎根。
2. 21	第1回風洞関係ワーキンググループ開催。
3. 14~3. 20	大型水路予備実験。
3. 26	第2回風洞関係ワーキンググループ開催。
3. 27	“筑波大学水理実験センター報告”第3号発刊。
4. 1	水理実験センター運営委員として榎根 勇（センター長推薦，地球科学系助教授），鈴木光剛（農林工学系選出，教授），吉野正敏（地球科学系選出，教授），高山茂美（地球科学系選出，教授），安達 勤（構造工学系選出，教授），辰巳修三（学長指名，農林学系教授）が，それぞれ再任または任命された。
6. 1	水理実験センター運営委員安達 勤に代わり，後任として椎貝博美（構造工学系選出，教授）が任命された。
6. 6	水理実験センター屋内実験棟施設計画（案）説明会開催。
6. 20	第11回水理実験センター運営委員会開催。出席者：井口、吉野、高山、榎根、椎貝、古藤田。
7. 1	水理実験センター長に井口正男（地球科学系教授）が再任された。
5. 1~7. 31	大型水路試験運転。
7. 16~8. 4	熱・水収支関係特別観測。
10. 17	“実験棟計画(案)”刊行。
11. 1	第12回水理実験センター運営委員会開催。出席者：井口、古藤田、榎根、鈴木、高山、椎貝。
12. 10	第13回水理実験センター運営委員会開催。出席者：井口、鈴木、椎貝、高山、榎根、古藤田。
12. 21	1979年度水理実験センター年次研究報告会開催。

編集後記

1976年度に発刊された水理実験センター報告は本号で第4号を迎えた。この4年間は、まさに、水理実験センターの建設に明け暮れた4年間であり、これだけの大規模な実験施設を、短時日のうちに僅か7、8名のセンター員でつくり上げねばならなかった苦勞は、人後に落ちぬものがある。なお一部の施設の建設を次年度に残しているものの、本年度をもって大型水路施設が一応の完成を見たことはセンター員一同にとって無上の喜びであり、米年度以降、多くの研究者がこの実験施設を利用されることを願わずにはいられない。多くの研究者に存分に利用されてこそ、この4年間の建設の日々は初めてよく生かされ得るのである。

センターが従来の研究所と根本的に異なる点は、センターの施設はセンター員のためにあるのではなく、まさにそれを利用する研究者のためにあるという点に存する。筑波大学に属する諸賢の積極的な利用をお願いする次第である。本号では特に大型水路施設の詳細な紹介を行ない、今後、大型水路を使われる研究者の便に供した。

昨年度より恒例となった水理実験センター年次研究報告会は本年度も盛大に行なわれ、17の論文発表があった。そのうち5編を報文として掲げる。報文の数が例年に比べて減ったのは、学会誌・学術誌への投稿論文がふえたためであって、

水理実験センターでの研究成果の発表の場が、そのまま学会に求められるような水準にまで達したことは、センターとしてむしろ喜ぶべきことであろう。しかしこのことは、本センター報告の報文の質が学会誌にのる論文のそれに比して劣っているということを必ずしも意味しない。

水理実験センターは本来、Environmental Research Center の欧名のもとに設立されたのであり、現有施設は水理実験施設と観測圃場に限られているものの、その意図するところは地球上のさまざまな自然現象の解明にある。センター員は多大な時間を要する施設の建設や保守、それを用いての観測に当たる傍ら、各々が研究者としてそれぞれの対象とする自然現象の解明に取り組んでいる。本センター報告の報文は、このようにして行なわれた個別的な研究成果の一端を示すものであり、したがって主に時間的な制約から、時として論文としての完璧性に欠ける点があることは否めない。しかし、そうした場合にも、研究の中間報告、ないしは展望として読んでいただければ幸いである。その研究対象は多岐にわたっているが、地表および流体中での諸現象を扱う点において共通している。これらの研究が、水理実験センターの今後の発展の新たな礎となることを願いつつ、水理実験センター報告第4号のしめくくりとする。

水理実験センター報告

第4号

1980年3月31日発行

編集発行 筑波大学水理実験センター
茨城県新治郡桜村
〒305 電話 0298—53—2532

印刷所 丸正印刷紙工株式会社
〒162 東京都新宿区東五軒町17の5
TEL 03 (269) 7 7 8 8 (代)
